

## 「不思議な授業」と「マサさん」と

はじめてのレポート（ゆきさんへの手紙として）なので、簡単な自己紹介をさせていただきます(\*^\*)v

私は、国際医療福祉大学大学院修士課程 1 年、在宅看護学分野の矢田有佑（やたゆうすけ）と申します。新卒の病棟看護師として国際医療福祉大学熱海病院で勤務して 6 年目です。大学院に入学したのは、いろいろな先生方のご講義が聞きたかったから・・・無知な私が努力し、学ぶことで、どこまで突き進めるのか・・・試してみたかったから、知的好奇心と探求心といったところです。

はじめて、ゆきさん、大熊先生のご講義に参加させていただき、「不思議な授業だ」と感じました。なんて言うのでしょうか、画面や資料で語る、のではなく、「心で語る」といったほうが正しいかもしれませんが、哲学的に言えば「心」とは存在しないもの、取り出せないものとなってしまいますが、素直にいうと「気持ちで語りかけてくれる先生だな」という印象でした。

そして、聴講生でゲストの「マサさん」、佐藤雅彦様のお話も勉強となりました。

私のような病棟看護師が認知症の方と関わりをもつ際、病棟での接触で、「患者」という固定概念に押し込められる傾向があるように感じます。病棟では、認知症の患者さんから自身の認知症のお話なんて聞くことも、触れることもありません。

そのスタンスでいた私へのマサさんのお話は、とても印象的でした。認知症が進行し、いつ本来の自分でいられなくなるかの恐怖すらも、私たちへお話くださいました。なにより私たちの前に立ってお話する姿は楽しそうで元気に溢れていたように感じました。

Dementia Friendly について、聴講生でもある山崎英樹先生の『認知症「に」ではなく、認知症「と」、「サポーター」ではなく「パートナー」に』というスライドの言葉も心に響きました。第1回の参加で、授業に引き込まれてしまった感じがします。誠にありがとうございました。

前期が終了し現在に至りますが、勤務との大学院の両立は大変だ、と実感しています。なにが一番大変かって、「つらい顔を職場でださないこと」「後輩に元気で学校に通い仕事は楽しくみせること」、結構これが大変です。ロールモデルになるということは、大変なことだと思います。ですが、なぜだか大学院の履修は楽しいんです。知らないことを知ること、今まで出会うはずのなかった人と出会ったこと、理解し自分の成長に気づいたこと。これに気付いてしまったら、つらい顔なんてできませんよね。変化していく自分にわくわくします！大学院の履修生さんたちは、みんな目がキラキラしていて自分の考えがしっかりとあって夢を語り合うと熱い討論になります(笑)。

本当に素晴らしい成長し合える環境にいるなと実感している最中です。